

和田節定
編輯

開明
小說

春雨文庫

第五號
下

20

25

30

35

A 448
10

春雨文庫第五編卷之下

東京

和田定節編集

○第十九回

ひさうと 久方の光り長閑けき春の日ふあづ心なく花の散ら
 ん 實ゲふ打うちはやく天てん氣きふて弥や生あひ半み端まの麗うららりさふ下ゲ
 こ 戸とも上あ戸とも心こころ浮うき立たち攘あ夷や鎖さ港こうの論ろんふ因より物もの騒さわ
 がしき世よふいあれども武ぶ具ぐと扱あふ商しょう人にんや銃ちゅう器きふ掛か

48-7542

職工らへ降て湧たる儲多きあめりり亞米利加さまと
徐と言ふと川柳点み穿ちそのころこころ其悪口も道理ふく
繁昌同志誘ひあひ割籠瓢箪携えぎおんきよとづ祇園清水
東山差我や小室の春闌て花見ひまふ間の無き佳節
まども勤王の士きんぎやうふ苦慮多けれを幕吏も隨て心
と悩ますと茂く静心しづこころるき日々ひびの景况けいさうふ新撰組の
隊長近藤勇と副長土方歳三ふくちやうさむらうの遊歩ゆうぽを名となと
不案内ふあんないある京師けいし近傍あきりの地ちの理りと極きまめ置あんと思おもひ歸かへ

るうら金かねらら祢ねどもども賑にぎふ花はなと餘よそ所ところふふるる竊ひそるる旅りよ宿しゆく
と立たいでい喜き撰せん法師ほうしが都みやこのとつとと詠よめととりり宇治うぢの
里さとと一見いつけん做しよさんと往むかききらふ京師けいしより里さと程ほども少すくし
隔へとる故閑静言こけんじやんん方かたるる近藤勇こんどうのぶへ宇治橋うぢはしの上うへ
より霞棚かすみだにびく山々やまと打眺うちながめ潺湲せんげんたる長流ちやうりやうの水源すゐん
水下すゐと遙とほり望のぞみ土方歳三ひらたけとせいざう対あつて言いふ此川このがはの近あり
江えの國くに琵琶湖びわこより出いれども川がはの中なか一いつ所ところ々々鯉こい石いし多おほくくて
船ふねを通つうずると克あはずと聞きり治ち兼けん四年しよん五月ごご源げん三さん

位頼政兵と平等院ふ屯一當橋の中程と切落一
て平家の兵と防ぐ時ふ平軍の中より力ハ百人ふ當
り声ハ十里ふ聞え齒の長さ一寸ありと言ふ田原
藤太九代の末孫田原又太郎忠綱河の流れふ馬と
乗り入れ先鋒せーと以て頼政の軍終ふ敗れ平軍
此方より彼方へ渡り一なり又元暦元年正月二十
日佐々木高綱梶原景季ら馬と乗り入れて木曾
義仲の軍と破りしハ彼方より此方へ渡りしなり渡り

たる者ハ勝渡られ一ハ愈破らる然れども淵瀨の模
様と知り渡らるべき所より渡つて勝まり地理ハ暗
くして戦争と為すハ盲人の杖と振て人ふ打ちある
が如く其目當無らんと思ふ故今日の好天氣ふ乗ト
お誘引申したりし今果して此事と思ひ出たり御
同前ふ関東生れるれを京師近傍の地の理ふハを
るハ暗きふ因り片時も油断の成らざる折々遊
歩ふ事よせ諸方と一覽みして豫め腹へ入れ置ざ

れば急場きんばに臨のぞむ後あとと取とるに必定ひつちやうするらん君きみの如ごとく
何思なにおもひとぬふやと演えんぶれむ土方ひつぐさ歳三としざううち點頭うづなづき一
長州ちやうしゅうの模様もようおよび諸浪士しよらうしの拳動けんどう今いまも事ことあらん
と為するの体ていえれども薩州さつしゅうの藩士はんしの半はんして激徒げきとの
と迫せまり未いまど一致いつちせしむ非あつずと思おもはる兔うも角かく
みも戦端せんたんと開ひらくと遠とほかゞざるの鏡かがみふかけて見るよ
り明瞭めいりやうなるべし仰あやの如ごとく地ちの理りと知しらざれば争いで
戦いくさひと接あひあはると得えん實げみ田原たらは又また太郎たろう佐々木ささき高綱たかなづなら

が功こうと立たしり竊ひそりみ川がわの瀬せと探さぐり豫あきめ浅あき所ところと知し
り居ゐる故ゆゑなり此度このたびの事件じけんの内うちより發はつせん外ほかよ
り起おこらん西にしより出いで東ひがしより来きらん其現そのあらはるる
場ばの定めがとけれむ只日ただひくみ奔走ぶんそうして四邊あちうと巡視しゆんし
し要所えいしよと定め置おかんふの如ごとく何彼なま処ところに見みゆ
る石いしの塔たが高たかさ五丈ごじやうあり十三層じゆさうありと言いふ浮塔うきたと唱とな
ふるりのり僕聞ぼくきく往昔むかし僧叡尊そうゑそんが此川このがわみて漁獵ぎよれつする者もの
み論ろんし殺生せつじやうと停とどめおの代しろりは布ぬのと晒さらすことと教しゆえ家け

業と為さ

せたりと今

木津川ふて布

と晒す人の其

漁師の子孫るるよし

此時叡尊一基の塔と川の

中み建てたるの則これふて如何なる

洪水あるも隠るうと無と以て浮塔と呼ぶ



よし今と往昔みせを數回戦争の何れ地も大砲

の為ふ撃倒され跡形の無らんを矢軍みての然

までふ至らざるふ因り土地と荒すとも少るうり

ると話しつ往昔を思ひ今と計りて尚其地此地と道

遥一頓て宇治の町み至りたるみ茶と製す家陶器

と焼く店ると擔を双べまを牧の島の土手下ふ至る

み急須茶碗茶瓶などと飾り附し最風流なる家あ

りけれを近藤土方の兩人へその見世先ふ腰をか

け一品二品のりのと買ひ此道の往く先へ何処へ出
るや彼処の横町と曲れを何と言ふ村なりやと尙
ひるどして暫時憇ひ居るうち奥より年のころ二
十前後と思はるゝ女の容顔美しきのをとらざる物言
取まへ節ふ協ひ色ある花の匂ひ翻るゝが如き
風情ふ見ゆれど髪と剃り白き衣服と着し法衣
の纏はざれども尼の姿なる女出来り二人ふ挨拶
て言ふ「今日ハ風もよく麗らるるな天気下は遊

歩ふハお衆とが一入下入ッ志やいませう勇ハ関東も
のへ何處へ往て見るのも聞ガ當で道と知らるゝふ
へ困り切るのサ尼「夫でハ彼徳川さぬのな方下入ッ志
やいませう歳「まア其尻ツ尾の方ふ振ら下ッて居
る味噌糟の様者サ尼「オホくは戯言むツかり併吾
儕ハ京都生れで居りるが徳川さぬのな方とハ
聞申すとハ懐ろろぞんとす。マア此処ハ餘りの端
近一二本の櫻るれども昨日今日ダ盛りの最中夫ハ

有るのが庭の木戸は覽遊をして下さいましと岐
て二人の顔見合せ容子あり氣る尼が口振り何
と兔もあわれ一見せんと思ふ心の同トみて兩人然ら
遠慮なく園の花と見せてお貰ひまうさうと言
ひつゝ立て傍へるる庭口と入り飛石傳ひ山樹木の
あひごとと潜りて這入れを尼の奥るる坐敷に在り
て二人と迎へ「山茶なれども所の名産な咽を
しよ一服と盆ふ乗とる急須と茶碗菓子さへ添て

差し出せを二人の縁ふ腰うち掛け「イヤまうお構ひ下
さるゝト會釋るゝ住居うゝ庭の模様と右見左見
るふ立派ならねど閑雅ふゝ其造り方何となく風
韻高く思へるまじの尼の何れより有る者ならん
と心の中ふ想像されとり尼の二人ふ茶と進め菓子
など挾とて愛相るゝ江海上の話と二人ふ問
ひ浪士の暴行は甚どりと聞き或ひの溜息
とほき或ひの愁然として涙と會と眼を潤はすれ

近藤問ふて言ふ「おん身未だ茶も齊しき花
もろふ斯る姿とい成られしぞ先刻よりの話一の
模様みての関東へ由縁あるお人と思へり故用無
き事なぐらふ尋ね申すなりと聞き彼の尼の打蕪
れ暫時辞も無しが吐息快いて言ふ「皆様のお装
と样見致しお詞とうかひ江戸のお方と察せられ
心来しく存トましとゆふお茶なると一ツ上といと見
苦しい所へお通し申しとの下座います吾儕へ関

春雨五下七

東のお味方して浪士の為非業の死と遂ましく島
田左兵衛の妻君香と申せし者左兵衛の計ひますと
事か世の中の為ふるう成らぬりの存トませねど
吾儕の身お取りましての恩深い左兵衛が目の前
ての敢果ある際期若し男あり協をぬま下り其場
下切り死致しませ祓ば成らぬ苦と差し込む癩
倒れとまき夢中みて夜と明しやうし人お助けられ
生氣も成ても天窓の上らず枕お着て當座と過し

左兵衛の身の話しとやが因らど弥増す哀しさ仮令そ
の日の後れても空しく見殺しふしと申し訊み死ん
で仕舞ふと思ひまゝいと人み留られ未練も存
生居れとせめて佐兵衛の後の世と安からせんと
思ふより煩惱るらぬ菩提心の請ふる恩と忘れぬ
為め髪を下せる身とるより只世の中の楽しそ
の何様しと事が風雅やら知らぬ乍らも春の朝の
梅櫻秋の夕アハ千種の花鳥の鳴く声虫の音のを

浮世の事へ目み入れず耳み咄と存トまゝと故京
都と距れて此宇治へ移りまゝとが只居る訊み
参りませぬから親族の者の世話と請け御覧の通
りの陶器渡世まゝ世の中の事へ一切聞まひと存
トて居るの下でたいまに江戸の方と思ひよ
り佐兵衛の無魂と慰める便ふも成うくと存ト
足と止めまゝと訊誠ふも耻かしい身の果下ごさ
ますト涙るぐらの物語りも近藤も土方も豫て咄く

浪士の為に死と遂に島田佐兵衛の妾の君香へ元祇
園町の藝子なりしとなると仮令一時の思ひ込とみ
もせよ只一筋の鬢の毛ととも惜がる年ごろみ斯
髪と下し尼の姿と成りとるん泥水より出し蓮葉
の濁りみ染ぬ者と云ふべし曾我祐成が菩提と吊
らちんとて尼と成りとる大磯の遊君虎が貞操み
髪鬢りりと心の裡に感賞しその志の厚さと褒め
君香尼の為に島田氏の横難と痛とまると君香尼の

貞操と譽め浮世を遁れし風雅の志と屢賞し
言ふ近し島田君も世の中の為と思ひ外夷の拂ふと能
はざると知つて諸事と扱ひ浪士の怨むるところと
成り害み遇ひ浪士らも又世の為と思ひ島田君と
害せしむり然れを討る者も討むのも國へ盡す
の誠より發るふして島田君と討し者も又討る
の時あるや討られす我々幕府の臣の端くれなる
由る幕府に盡す世の為と思ふふて攘夷倒幕と

近藤勇土方
歳三計らず
君香が隠道
の陶器店を
訪ふ



唱ふる者も又これ國の爲なぞその論の合ざる所よ
り發る争ひひまり因て吾々として翌日の命へ計られ
ずと雖も國の爲に死と思へを悔むるは島田君
も然の如くならん身未だ盛りみ到らぬ花を
るみ長かる後と尼法師ふて果んに残りとし然
言へ斯閑雅み暮して世と送らんも中々ふ樂しか
らん此志と命あるうちみ島田君が知るるは
か一嬉しく思えれんみと歎息爲れを土方も亦君

香の身の容色と言ひ貞操とつひ類ひ少るかるみ
深山の花の問ふ人もそく移ひ果んと惜と且その薄
命と歎トつ猶君香と慰め二人の此處み稍時間と
ぞ費しける

島田佐兵衛の妾君香の佐兵衛の死後髪と落
して尼法師の姿とまり名と貞信と呼び豫て佐
兵衛より與えらるる金と蓄へあり且家財と
うの十分るり一故彼是の資本と以て宇治牧の島

へ陶器と焼く店と開き此處に住居て浮世の熱
の塵と除け只月花を友とほし島田佐兵衛が後
世と吊ひ行ひ濟いて世と経るゝ類ひ稀みる貞
婦と言ふべし前島田の事と書しへ力石とそ
の女房お増の因とみ依りて成るが此程貞信尼
の物語をせし者あり故に後れ走るぐら茲み出
せり或ひの貞信尼と祇園町の藝妓來葉まり
とも言ふ総て此書の趣意と為るところの表

街道の裏路ありて婦人の行ひの人と異ると掲る
るまを男子の事跡みの往々立消のりのあり看官
これと咎め給ふる然れども近藤勇士方歳三と
うの後み至りて聊う話あり追々説出んの

○第二十四回

表と通る人の都く一の言ふ寫真が出来らるま
動けが宜ふとるふらアア吉太郎さん一寸お咄きな
さい彼様る事と言て唄つて往ますからホニお梅

さんの心意氣が彼どつと嬉しいどらうが寫真屋
へ往ても何でも並んで居るのと否がるのど物ヲ夫
どらう一人寫一の方ハ随分能くをりきり寫つた
一所み取との自己の體と離れやうと為るので動
いとりんどらう是を見むト且辺吉太郎ハお梅と二
人で並び取り一寫真と別々み取りとる寫直と出
一人並んど方とお梅の前み置き「夫此方へ論
より證據でお梅さんのウムと何と遺つと見え

えて強い顔として居ると梅「アレ貴君こそ鬱陶しい
女どと言ふ様な顔でと言ひるぐる寫真画と取り寫
顔と吉太郎の顔とそつちと見此方と見くら
へ居らうしが梅「オアは覽みさいお前さんの男どから
無つても宜い愛敬までが寫つて居てそつくり其俵
の顔下は坐いますワ真正み不思議ぢやア有ません
う祐エキ他の者の顔が寫つて居りやア不思議どが
寫一と顔が有のどから當然ぢやア無り梅「然ケ先

刻寫真屋へ往と時ふの貴君と双んで居て寫すのど
から誠み間が悪くって寫真屋が厚面皮女どと思
ひ仕舞うと何様ふ否で座のまゝとらうき「夫ど
から何の彼の言て自自己の方が餘計宜と思ッそ
居るのみ違ひ多いお前へ誠み否どつとらうが此方
へ誠み嬉しくつてへ寫真やさん憚りるぐう彼様
の女と並んで寫真と取んでげす弁して拙の女房の
女が美くって愛敬のある斗りちやア無く程の宜

いのと心のいきと夫々後へ手管が上手で男と愚弱
と為せるのと水性充満どから夫まで寫してお呉る
せへト言て自慢を志さかつこのサ梅夫りやア吾儕どつ
て腹の中と明をみしめて宜るらば愈ふ向ひ憚りな
ぐう此様る男が持るあう持ては覧と言ひますワオ
あゝ言持て御覧の宜が其後編へ往と甘口で無性
で意地が汚るい何の言ふ跋が附て居るのどらう梅
モウ串戯どころで無い何様でも上方へお出小成

のでその日限も間ぢりとのお話しも及外聞の悪い
 も忘れ今日へ御一所ふ連れて往て戴いて貴君の寫真
 をりりて無く吾侪の寫真まゝと彼様へ二人並んで
 居る姿まで取との嬉しう申坐いますが一日本目小
 掛らるくつても案トられて氣の揉ると京都と江戸
 とふ離れて一年も二年もお顔がえられぬ様どつ
 とら御膳も咽喉へ通らるくまり死で仕舞どらうと
 思われます若し左様ありと此寫真繪のお次女が今の

世計りう後の世までの形見ふ
 成りへ為まいり何ど哀しく
 つて成りません松浦佐用姫
 とやらへ良人の狭手
 彦とらふ別れる
 哀しその
 餘り石ふ成て
 仕舞ととやら吾侪



貴君と慕ひ万一石ふでも成とら貴君へまア嘸可笑
くお思ひなさいませう祿人左様成とら此寫真も一
所ふ石ふく仕舞ますつと言ひつホロリと泪と翻
せば吉太郎の天窓と搔るぐく前と京都へ引き
取るり自己が此方へ帰つて来るまでの石ふもつて
居て呉ると水性が出来祿へかゝ有難いけきども
間違つて蒟蒻小でも成られと大騒動ごア梅
ア串戯ちやア有ませんようト吉太郎の顔とあつ

と見詰て溜息つき「夫ちやア彼の寫真とどが貴君
のお肌の先を少し下さいな吉「何ふ為るのぞ梅「此寫真
小添て肌身と放さず持て居ますかサ吉「左様言ふ
沢多生肌の三枚や四枚引をぐ上納すると為て
も宜が其代りお前かゝも貰ひなけやア成らねへ
羨知ん子梅「真正小吾侑の寫真も持て往て下さい
ますり其処らで棄てお仕舞なさいませうエ真正と
はなはいますり吉「持て往ねへ位あゝ何下間の悪い

思おもひと一ひとく二人ふたりり下くだ取とて貫くわんひみ往むかりのうナ梅うめ一ひと真正まこと
み持もちてのら一ひとつて下くださいまするら其その寫しゃ真まみ添そへて是これも
お邪よこしま广ひろまぐらお持もちなすつて下くださいま一ひと然ごとが笑わらちや
否いな下くだ座ざいますヨと紙かみ小包こづつと一ひとののをと出でせを吉きち太郎たろう
手てみ取とり可かこりやア毛けちやア袷あくう梅うめ一ひとをいト言いつと
をかりで黙だまつて居ゐる吉きち一ひとお前まへの髪かみどのト言いひるぐら
お梅うめの天あま窓まどと見て居ゐる梅うめ一ひと厚あつ面う皮ま如ごとと一ひとお思おもひな
さりさりりの志しままひりと一ひと遠とほ慮りと一ひと居ゐりま一ひとと吉きち自じ己じ

みも呉くれるうと被おつ仰しやいま一ひととと僥さん倖しやく思おもひ切きて出でしこの
で座ざ坐まいます併あ夫むの吾ご儕せいの心こころと貴あ君きみみお知しらせ申ま
一ひと計はかりりの志しる一ひとお目めみ掛かさへ致いたせをお棄する
すつと下くださいま一ひとても最ま宜よろしいので座ざいますト
氣きの毒どくさうお顔うわ赭あからめて差さ伏うつむけバ吉きち太郎たろうの少すく
一ひと困こまつと風かぜみて一ひと一寸いち見みると知しれねへが中ちゆうの方かた
と切きとのり梅うめ一ひとをい吉きち一ひと夫むちやア自じ己じも髪かみの毛けと切き
て取と交くつこお為い様さまどう後ご醍たい醐ご天てん皇こう御おん旗し揚たかの時とき中ちゆう

納言藤房卿が墮落の別嬪左衛門佐局へ別れ不
菴を御自分の髪の毛と切り「黒かこの乱れん世ま
でみぐへを是と今の形見とも見よト言ふ一首
の歌と添て贈られるとその別嬪が大愁歎下「書
置し君が玉章身に添て後の世までの形見とや見
んと言ふ歌と残り川へ身と投て死んどと言ふとが
太平記不出て居るから辻占の悪いので髪の毛はか
えて居るとのど梅一夫も藤房卿とやらが死どみら

だが軍の門出で勝やら敗るやら知れるいのみ死と
へ餘まりる思ひ切り様吾儕や貴君も目を掛る
までの貴君ありて置のどから毎日大事も守り
申し居りますのき嗚呼何もしても勤と言ふも
の儘に成らるの物どなア折りから其處も有つと
味せんの糸が切てポツン

春雨文庫第五編卷之下終

所弘賣

自其と橋のこころの... 初め... 眞の義人とあり... 爲永春水精削

妙業 初み... 爲永春水精削

書物共繪入讀本所 文永堂 大嶋屋傳右衛門

開明 春雨文庫 第四編ヨリ 近世の烈婦孝女乃傳説を

松村春輔編輯 復古物語 初編ヨリ 出版 遠ハ明治太平記の前篇ヨリ...

和田定節編輯 参考鹿兒島新誌 初編ヨリ七篇 此書西国征討の始末を詳細ニ...

東京書肆 大島屋 武田傳右衛門

010190508299

